第63号　50円
昭和54年9月25日

内容

方法論をめぐって…… 1
千葉大学が協力会員校に加入…… 2
千人会…… 2
山内恭彦先生の喜寿を祝う会…… 3
第1回大学院共同セミナー…… 4
セミナー参加者のレポートから… 5
第103回大学共同セミナー …… 6
第7回九大学合同セミナー…… 6
ことばとこころ…… 7
『建築文化』が当ハウスを特集 … 8

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

方法論をめぐって

――諸学の系譜と真理愛――

上智大学理事長　柳瀬睦男

個別的な学問の方法論を考えるという立場は、メソドロジーと呼ばれ、古来からあった。メソードとは道の意であるが、どの道をたどってある知識を得るかについてはいろいろな学問的営みがあり、それぞれの対象への対し方があって、それらが積み重ねられて一つの個別的学問が形成されてきた、と考えることができよう。

しかしながら、われわれは、現場で学問をする際に、方法論を意識しながら研究しているわけでは決してない。特に自然科学者は、個々の実験や理論的研究において学問的にも人間的にもエネルギーを要するので、一体、この観測に客観的価値がありやなしや、と反省する暇はほとんどない。しかし、何月何日に得られた観測結果はどうして普遍的価値をもつのか、地球上で測ったエレクトロンの質量と宇宙の果てで測ったそれとが、どうして同じか、という質問を次から次へと浴びせられると、われわれはたちまち方法論の問題にぶつかる。自分の研究にはどのような基礎づけがなされているか、という問題がわれわれの眼前に浮かび上がってくるのである。

方法論が歴史の中で問題となるのは、学問自体が曲り角にきたときである。自然科学は、ガリレオ、ニュートン以来、18世紀から19世紀の終りにかけて直線的に発展してきた。ニュートンの古典力学から、非常に高度に数学的に整理されたかたちで解析力学が生まれ、あるいは、それまで単なる電磁気的な現象としか知られていなかったものが、実験的な方法論によって整理され、電磁気学という一つの壮大な大系にまとめられてきた。この過程では、暗黙の了解のうちに成立した方法論があったのである。ところが20世紀に入り、相対性理論や量子力学といった新しい学問が出てくると、そこに非常に大きな方法論の議論が起こってきたように思う。

私自身が現時点で抱いている最も大きな方法論的関心事は、一つは物理学と生物学の境界領域の問題である。さらに、もう少し広い範囲の問題意識としては、西欧的な思考形式による学問の形式と東洋的思惟形式との問題がある。論理的な一貫性の上に立った問題のたて方が果たして唯一の哲学的方法論であろうか。

もう一つは、神学的方法論の問題である。神学的な問題のたて方は必ずしも信仰を前提にしない。一つの学問としての神学がなぜ存在しているか、というふうに考えてみることは意味のあることであろう。人類の歴史、とりわけ西洋の歴史を見ると、いかに多くの人間と、その時々の最高の知性が神学に注ぎ込まれたか。これは実に驚くべきことである。中世においては、学問をするには司祭になるしかなかったし、そこでは当然のことながら、まず神学を学ばなければならなかった。中世紀的神学やスコラ哲学は一顧にも値しない、と悪口を言われる根拠は確かにあるが、そこでは学問とは何か、真理とは何か、われわれの進むべき道は何か、という根本的な問題が投げかけられているように思える。〝もしもこうならば、こうである〟といった仮説的な表現で命題をたてるような学問だけでは、現実の事物の存在とか人間とか世界というものはわからない。現実にここに物があって、私がそれを認めている、という根拠は何かをつきつけたのが、実存哲学であった。このような問題意識に関連して神学が特別の地位を持つのは、神学が、各個別的な人間の一回だけしか経験できない存在(Einmaligkeit)の意味は何かを、真正面から取り上げているように私には思えるからである。しかしながら、神学自体にも、方法論について様々な議論が行われている。七年前にロナガンが『神学の方法』の中で提出した問題もそれである。それまでのカトリック神学者は、中世以来、一貫して自分たちの神学の方法論は最良のものであると考えていたが、他の学問が発達し、学問と学問とのかかわり合いが生じると、果たしてそれが唯一の方法かという問いかけをせざるを得なくなったのである。

このように、現代においてはいろいろな学問が方法論の問題に直面している。経済学の中でも、数理経済学は物理学的な一つの方法論をモデルにしている。物理学は言うまでもなく、数学ということばを非常にうまく使って現象を整理している学問である。ニュートンの力学法則 $F=Ma$ という極めて簡単な方程式で、ほとんどすべての力学的現象を説明することができるし、予言も可能である。二つの初期条件、つまりある時刻における質点の位置と速度が決まれば、この二次微分方程式を解くことにより、すべてがわかる。このことは、非常に複雑な現象も一つの等号で結んだ三つの文字で統一することができたことを意味する。しかし、たった一つの方程式で人間を月まで送ることができても、われわれが経済現象について予測できるのは、せいぜい一、二年先のことである。物理学者の目から見れば、それは全く当然のことである。部屋の中にいる一匹の蠅の運動は、われわれには一〇〇分の一秒先ぐらいのことしかわからない。経済現象とは東京中の蠅の今から一分先の動き方をどう決めるか、といった類いの問題のような気がするのである。他の学問についても同様に、とくに生命現象や人間が介入してくると、自然科学の方法論では限界があるのである。

サイエンスということばを、人文科学も含めた学問の意味に用い

（2ページ4段目へつづく）

千葉大学が協力会員校に加入して

国立大学は12校になる

協力会員校は国公私立合計54大学

有力な国立大学の千葉大学を昭和54年度から協力会員校に迎えた。昨年度は筑波大学が加入したので、協力会員校が首都圏に拡大したことになる。文部省の勧奨と千葉大学長香月秀雄氏の配慮に負うところが多い。同大学の小島事務局長が、この気運を実りあるものにされたことも記憶したい。

ここに理学部の井上勝也教授ゼミのことを紹介し、共々に加入を喜びたい。井上教授は、当ハウスのファンである。よく利用されるグループである。したがって御当人の井上教授が千人会員であるばかりでなく、講師の石川達雄、助手の金子克美の両氏もまた千人会員である。このゼミの卒業生の社会人もよく参加される。

なお今夏は里村洋一助教授など医用電子工学研究会が利用され、早くも来年7月には薬学部の夏期薬学セミナーの予約がある。利用増加とともに千葉大学と当ハウスとの連帯と協力がいよいよ深まることになる。

▼千人会

昭和54年6〜7月

◇現在会員は一、五八二名です

大学人＝一、一九四名
社会人＝　三八八名
（54年7月31日現在）

◇新しく会員となられた方々

7名〔第49回報告（申込順）〕

B　日本女子体育大学助教授　滝　幸三郎殿
B　東京慈恵会医科大学　病理学教室　城　謙輔殿
C　弁護士　花井　増実殿
C　東京ガス不動産㈱　米山　哲夫殿
C　山中湖畔ホテルマウント富士　広瀬五十鈴殿
A　自営業　中沢　正和殿
C　旧職員・主婦　深山　和子殿

◇入会のことば

みなさんお元気ですか。結婚退職して五年、二人の男児（三歳、八ヵ月）をかかえ、最近ピアノ教師を始めました。その収入から少額ですが寄付いたしたいと思います。

旧職員　深山和子

◇

覚えていて下さったでしょうか。今年1月19日から二泊ゼミを行った山梨県立女子短大の者です。短大を修了して今ホテルで働いております。ゼミに集まった仲間の顔、真剣に討論し合ったあの頃を常に忘れぬよう、そして自己の勉強のためにも千人会入会を希望します。

ホテルマウント富士　広瀬五十鈴

◇会費ありがとうございます

昭和54年6〜7月（敬称略）

山下肇、石井修二、井上繁、柳下勇、和田英一、澤島侑子、大籠まり子、竹内喜夫、古畑和孝、柴田恭二、三浦徳弘、加藤秀俊、荒川有志、道喜美代、古西信夫、堤辰次郎、藤井耕一、松崎義徳、鶴見和子、宗像元介、高橋忠次郎、小畠守生、福山直美、福島要一、長岩寛、柴田勇造、大内力、荒井基、小倉充夫、上野芳夫、中村幸安、望月継治、前田護郎、上田初子、阿久津喜弘、秀村欣二、嶺哲之助、篠原泰三、岡田正弘、江沢洋、松崎奈岐、尾田綾子、片岡清子、大野泰雄、松尾浩也、川島順平、笹森健、西川治、坂野正高、西川義朗、青木郁朗、中野スミ子、太田秀通、金子晃、石川達雄、柳田博明、柏原啓一、栗林恒雄、臼井久和、高野史郎、石川信男、阿部斉、吉田幸弘、見田宗介、朱牟田夏雄、伏見康治、中嶋嶺雄、名東孝二、吉松藤子、市井三郎、黒田成俊、高橋勇悦、岩橋宣隆、慶谷伸代、藤原鎮男、鈴木務、藤野登、西嶋定生、内山尚三、和田義信、浅川淳、関順也、三和治、北野美枝子、鳥海俊宏、田中未来、柴田政利、市川節子、辻達也、村上直、山本襄治、福富啓泰、中村哲哉、武者利光、石田雄、松島恵、土田美芳、中山昌、長清子、柏木恵子、高橋公雄、犬井鉄郎、小川圭治、中村進、矢部章彦、古賀正則、荒井良雄、石井素介、栗原尚子、花井増実、林俊一、野口武徳、川田雄一、徳末愛子、石井進、藤平重雄、土山牧民、米山哲夫、熊田陽一郎、河田喬夫、田島恵児、福田歓一、長浜洋一、三橋文雄、山西貞、中川一朗、千住鎮雄、村田勝彦、松平文朗、厚東偉介、中島章、讃岐和家、綿引二郎、小林宏晨、外山敏子、角瀬保雄、石川馨、尾崎茂、磯部力、岡沢憲英、朝日信夫、小池生夫、山井湧、林泰造、太田善麿、小川信子、鮎川宗藤、安藤良雄、梅沢豊、中村浩三、島薗安雄、矢野正、谷清、奥田夏子、二上貴夫、芥川龍男、平出彦仁、三輪公忠、米村貞蔵、望月一憲、色川大吉、小池滋、布施濤雄、黒田道雄、菊地雄二

◇会費に添えられた言葉を拾う

本年も無事に誕生日を迎え、千人会の会費を納めることができ、最上の幸福と思っています。セミナー・ハウスのご発展を祈ります。

明治大学講師　藤井耕一

◇

本年より教職につきました。忙しい毎日ですが、元気でやっております。セミナーの皆様もお元気でお過し下さいませ。

関東女学園勤務　大籠まり子

◇

「喜寿」の志により倍額にしました。

野村総合理事会監事　柴田恭二

◇

飯田宗一郎先生の有難いお言葉！　精進に努めたいと思います。偲親

日本大学教授　名東孝二

◇

めくるめく歳月が嘘のように、東医歯大を去って名大で二年目の夏を迎えようとしています。誕生カードをいただき、本当に「今年も元気で誕生日を迎えた」と心から感謝しています。

新入生オリエンテーションの或

（3ページ4段目へつづく）

（前ページよりつづく）

れば、学問の方法論なり基礎を考えることは、メタサイエンティフィックな立場と言えるだろう。アリストテレスの『フィジカ』の後という意味から、哲学、形而上学はアリストテレス以来、メタフィジカと言われるが、自然についての学問の基礎、あるいはその上にあるものという意味での哲学、形而上学はどうしても必要である。方法論や基礎を考えることは、一つの哲学の営みだが、とくにそれを形而上学と名づけることができるのではないか。これが私の一つの提言である。

次に、このメタサイエンティフィックな立場から問題を扱おうとする時に、対象となるものは何か、ということを考えてみたい。個別的な学問の対象は経済現象であったり、物理現象であったり、心理現象であるが、メタサイエンティフィックな立場において立ち現われてくるものは、存在一般である。われわれが学問的に対象とするあらゆる現象や事物の最も普遍的な属性は、存在という概念であろう。存在論（オントロギー）的な意味で形而上学を考える立場は昔からあったが、学問全体が曲り角にきている状態の中で、現代のわれわれもまた存在そのものを問題にしていかなければならないと思うのである。

最後に問題提起として、フランシス・ベーコンのことばを引用して、皆さんの討論の参考にしたい。「本当の自然科学者は蜜蜂のようだ。集めた蜜をより良いもの（はちみつ）につくりかえる。経験主義者は蟻のようだ。一生懸命働いて外から運んできたものを、そのままの形で置いておく。合理主義者は蜘蛛のようだ。自然のものから蜘蛛の巣を編み出すが、それは自然そのものではなく、自分がつくり出した別のものだ」。

（第1回大学院共同セミナーのゲスト講演より。文責・編集者）

飾らず、温い心で歓を交わす
山内恭彦先生の喜寿を祝う会

昭和54年7月31日――遠来荘

我らの山内恭彦先生には、7月2日、七七歳になられた。物理学界の同僚、朋友、門下によって、盛大なお祝いが東京会館で催された。しかしこの学際的大学人の喜寿を祝うためには、もう一つの祝宴が必要であった。

開館以来今日までの一五年間は、大学セミナー・ハウスの学問的風土づくりの歴史であった。その風土は共同セミナーを中核としてつくられた。強靱な学問的思考力の持主である山内先生は、天が大学セミナー・ハウスに与えられた卓抜の師範である。いまは亡きガン学者、吉田富三博士が「山内君は、ニュースを見ると、あなたのところによく行っているようだね。うまい人と仲よくなったね」と飯田館長にいわれたという。昨年刊行された「大学共同セミナー一〇〇回の歩み」の中で、山内先生の存在は共同セミナーの慈父といっても過言ではない。実に数多くの学者を多摩の丘に呼び集められたのである。すぐれた学者達の関心と協力を仰ぐことによって、大学セミナー・ハウスは独自の学問的風土をつくることができた。

遠来荘における祝いの席で――山内先生（中央）と三枝（左），大森（右）の諸氏

山内先生は日本的風土の中から生まれた近代の科学者である。遠来荘は多摩の民家である。セミナーの丘に移築され、日本的客間となっている。遠方より来た朋友をもてなす客間であるからといって、山内先生は遠来荘と名づけられたのである。喜寿のお祝いをもう一度やりなおしたいという発起の理由がここにある。

午後5時、夏の日ざしが弱まる頃、すだれが縁側に涼味をさそい、庭石に水がまかれた周辺の風景が到着した来客の心をなごませている。主賓山内先生を囲んで集まる者二十余名、床の間の掛軸は、主賓寄贈の「大学之道」である。

後藤英一教授の乾杯で喜寿を祝う宴は開幕となった。集まる人が良い。酒が良い。さかなが良い。話題が良い。もてなしが良い。職員の中にも多年の交わりが出来ていたので、なじみの深い古顔が約十名お手伝い傍らお相伴役をつとめた。この会こそ欠席は出来ないといった人々ばかりであったが、主賓が学際的学者であるから、宗教思想の三枝、比較文化の芳賀、哲学の大森、造船の乾、心理学の岡、科学史の村上、といった諸教授が物理学者の中に加わって、交交放談的に、山内先生との関係を祝辞の中で述べられた。孫のような上智の若い卒業生飯尾・古本両者も出席、さらに学習院大の江沢、上智のディタース、押田、東工大の吉田の諸教授も出席、年齢に差なく、大学に別なく、これこそ大学セミナー・ハウスを、人で表現した場面であった。

この会の記念品として羊の革のアルバムを企画室の飯田能子から贈呈。さらに酢屋食堂社長が準備された七七本のローソクを立てたバースデー・ケーキを飯田館長から贈呈、喜びの拍手の中で山内先生がキャンドルのあかりを一気にふき消されて、77年の人生を記録された。アルバムは、近年写真にこっておられる先生が、アルプスの山荘などでとられた名作をはられるためにと考えた趣向である。

相集うて主賓の長寿を祝い、相互の友情を深め、歓を極めて時の過ぐるを知らず。

8時半閉会。別れを惜しむ者はタクシーを使わず、京王線の北野駅まで友と語らいながらの徒歩をたのしまれた。主賓からも参会者からも最良の夜であったと後日感想を寄せられている。

千人会員第一号山内恭彦先生は、この日から名誉会員第一号となった。

【出席者】
乾崇夫、芳賀徹、江沢洋、岡宏子、吉田夏彦、村上陽一郎、三枝充悳、後藤英一、小柴昌俊、大森荘蔵、R・ディタース、押田勇雄、久保亮五、飯尾右一、河田喬夫、藤永鉄雄、酢屋善元、岡山猛、飯田宗一郎、飯田能子、村松武司

【会費参加者】
野田春彦、柳瀬陸男、小谷正雄、川原栄峰、笠耐、福田歓一、木村尚三郎、鈴木皇

（前ページよりつづく）

る日、朝露を踏みセミナー館への道端に自生する、〝やぶれ傘〟を見つけ、思わず歓喜したものでした。八王子の丘は永遠に私の心の中から消え去ることはありません。ご発展を祈りつつ……。

名古屋大学学生部学生課長　嶺哲之助

◇

学生の課外教育活動担当から、医学部附属病院外来掛に移り、患者さんの立場、身になって努力して参りたいと思っております。今後とも千人会の発展をお祈り申し上げます。

東京医科歯科大学医学部附属病院　医事課　栗林恒雄

◇

昨年と今年の分です（おそらく昨年の分は未納だったと思います）。万一、支払済でしたら、昨年の分は寄付させていただきたいと存じます。

上智大学神学部長　山本襄治

◇

六五歳の誕生日を健康で迎えたことを感謝して「三千人会」費をお送りします。

東京学芸大学名誉教授　三橋文雄

◇

千人会の益々の御発展と飯田館長の御健康を祈念致します。お蔭様で技術士業に専念して居ます。

中村技術士事務所長　中村哲哉

◇

美しいカードで誕生日を祝って頂いて有りがとう存じました。いくつになっても祝って頂くことは嬉しく、新たな感慨で周りを見ることができる機会が与えられます。

日本女子大学図書館友の会　常任理事　北野美枝子

◇

自分の誕生日のことはつい忘れておりますので、毎年思い出させていただき、無事に一年を過せたことを感謝しております。今年は誕生日をアラスカ沖ベーリング海に浮ぶ孤島セントポール島で野鳥を観察しながら迎える予定です。

日本女子大学教授　奥田夏子

◇

税金のような強制された課金でなく、わずかではありますがセミナー・ハウスの教育事業に参加している喜びをもって送金申し上げます。

朝日会計社　鳥海俊宏

◇

会報等嬉しく拝見しています。一度現地へもお伺い致したく存じます。

群馬女子短期大学　中山　昌

◇

私は本日をもって満六五歳となります。したがって明年4月1日付をもって定年退職致します。

東京医科歯科大学教授　望月一憲

◇

千人会のカードが誕生日を自覚する唯一のものとなってきました。充実した一年間をと願わずにはおられません。

法政大学教授　芥川龍男

第1回大学院共同セミナー

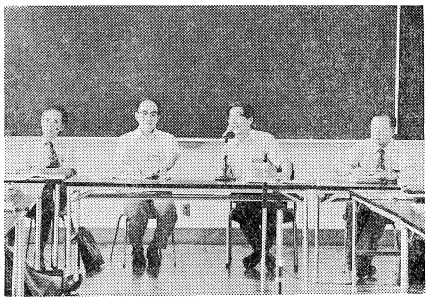
二回連続セミナー〈夏の部〉

主題――諸学の系譜と真理愛

――方法論の再検討――

期日――昭和54年6月23～25日

〈全体指導・講話〉
東京大学名誉教授　前田　護郎
〈ゲスト講演〉
方法論をめぐって
上智大学理事長　柳瀬　睦男
〈講話・演習指導〉
（人文）神学と経験
立教大学教授　塚田　理
（社会）社会科学の対象と方法
明治大学教授　田村　光三
大塚史学との出合い
中央大学教授　山下　幸夫
〈自然〉物理学とは何か(1)――アインシュタイン一〇〇年
上智大学教授　鈴木　皇
〈運営委員〉
聖心女子大学教授　岡　宏子
〈参加学生〉36名（内女子7名）


左から塚田，鈴木，柳瀬，前田の諸氏

慶大、早大（各5）、東大、上智大（各3）、東外大、横浜国大、ICU、専修大（各2）、お茶の水女大、弘前大、東工大、都立大、青学大、駒澤大、理科大、中大、武蔵工大、明大、立教大、神奈川大（各1）計20校

▽△

大学院生を対象とする共同セミナーの実現は、昭和50年6月、当ハウスに大学院セミナー館が建設されたときからの懸案であった。

近年、大学問題は大学院に移行した、とまで言われるように、学生数の膨張に伴って起きた質的変化はそのまま大学院にまで押し寄せてきている。この結果、本来の研究者養成機関としての目的が薄れ、他方では実社会が必要とする高度の教養・技術を身につけた人材の養成機関として多様な要求にも応えなければならなくなっている。こうした状況下にあって、学生の側においては、何のために大学院に入るか、という問いかけが大学の場合と同様になされなければならないのである。

大学院が単に学部の補足ではないとすれば、実際にそこに学ぶものの学問の態度はどうあるべきか。学部から大学院へと進むことは、極度に専門分化された学問の領域へと突き進むことであるが、この専門化への道は、時に他の学問分野への無関心を招き、また、その専門領域に特有の研究方法を通してのみ事象を見つめる心や、専門の道具を駆使する職人を育てることにもなりかねない。言いかえれば、〃学問の基本的な姿勢である真理を求める人間の情熱と、真理を愛する人間の心情に離反する〃ことになるだろう。

こうした問題意識から、およそ研究にたずさわるものに共通の真理愛の観点に立って、諸学の系譜が領域の異なるそれぞれの専門分化した学問にどのようにつながるかを考えていこうとするのが、このセミナーの主たる目的である。

▽△

〃大学院セミナー〃の具体化に当たっては、前田護郎先生に白羽の矢を立てて一年越しでお願いしていたが、ようやく機が熟して本格的な準備に入ったのが今年の1月であった。当初は先生のご専門である聖書学を中心に、若い研究者十数名ほどのセミナーを予定して、企画室では「真理愛と聖書」「学問の系譜と聖書」などのテーマを考えていたが、セミナーの趣旨や目的、全体の構成などを三回にわたって協議していく過程で、最終的に「諸学の系譜と真理愛」に、副題も「真善美の再検討」から「方法論の再検討」となった。なお、企画の段階で柳瀬睦男氏が、上智大学理事長としての多忙な要職におられるにもかかわらず、強い関心を示され協議に加わられたこと、第一回の大学院セミナーであることから、共同セミナー委員長岡宏子氏が全面的に協力して下さったことを記しておきたい。

▽△

第一日目は柳瀬氏のゲスト講演（要旨は1頁参照）で開始され、つづいて全体指導の前田氏による主題についての講話が行われた。氏は、まず諸学の系譜とは何か、から話をおこされ、クリューガーの「学問（科学）は真理のあとにくる問題である。なぜなら真理は学問の方法が従っていかねばならない道の目標だから」という言葉をひいて、学問の方法、そして人間の営みとしての学問と、善と美に結びつく真理の問題に触れ、人間が人間であるために最も大切なものが生命であり、それが健康のうちに長く持続することに貢献するものとして真理がある、と語られたが、それは氏の若い学徒に対する暖い励ましのようでもあった。さらに理性と信仰の問題から真理論に触れて話を締めくくられた。

翌二日目は田村、鈴木、塚田、山下の四氏の講話と、それぞれに設けられた質疑応答で展開された。参加者はこれらの講話を通して、人文、社会、自然の各分野にわたり方法論をめぐる問題の所在と、各先生方の一研究者としての専門に対する取り組み方の一端を学ぶことができた。ただ、三日間に繰り広げられた質疑応答などからは、各講話の統一テーマが非常にたどりにくい、といった感想に伺われるように、このセミナーが拠って立つところの〃真理〃についての理解が必ずしも十分になされていない、という印象を受けた。一方で現在、取り組んでいる専門領域の方法論に対して何らかの手がかりをつかみたい、という切実な問題意識がどの参加者にもあって、副題に掲げられている「方法論の再検討」に期待するところが大きかったようである。真理、学問（科学）、方法を参加者がどのように理解したか、あるいはどのように考えたか。それが各人にとってのセミナーから得た成果につながることは間違いあるまい。

▽△

今回は、大学院セミナーとしての配慮と工夫がいくつかなされた。二回の連続セミナーとしたこと（次回は11月30日～12月2日に開催）、参加者に一、〇〇〇字程度のレポート提出を最終日に課したこと、専門の異なる参加者の相互理解を重視し、企画室が予め応募理由をまとめて、これにより初日に設けられた全体集会で全員の自己紹介が行われたこと、などである。ただ、一回目（夏の部）と二回目（冬の部）との間に何をすればよいかが明確でないことと、大学院生を主たる対象とするも、大学院を志望する学部学生にも参加の幅を広げたため、学部学生が一六名を数えたことから、若手研究者の学際交流を期待した大学院生には多少の不満が残ったことが今後の検討を要するところである。しかしながら、学部学生にとっては、大学院進学の極めて適切なオリエンテーションとなり、好評であった。

なお、参加学生のレポートは、有志学生の手で印刷して一冊にまとめられることになっている。このセミナーでかれらが何をどのように考えたかを知る貴重な記録である。

大学院共同セミナー
参加者のレポートから

❶――慶応義塾大学D1　沢井　秀文

自然科学と社会科学との方法論の決定的相違は自然を主体とする前者に対し、後者は自然における人間の営むダイナミズムを追究することにあると思う。そして社会科学においては学問に対する人間（研究者）の価値意識と事実の確証とを明確に峻別することが肝要である。そして科学研究者にはアインシュタインの言うように「世界の内的調和への信仰」ともいえる激しい情熱こそが不可欠であり、ここで初めて「真理を愛する心」が誘起されるのである。

自然科学が客観的真理を極め、社会科学が人間社会の法則を発見し得たとしても果たして人類の幸福に貢献できるのであろうか。これは科学の範疇を超えた「哲学」の問題であり、人間の「罪」と「罰」の問題である。我々の求める真理が「愛ある神のなせる業」であるのか、高度に発達した「現代文明の神」であるかは人類の死活の問題である。したがって我々の現在探究しつつある「科学」が「愛ある神の所業」である真理愛を根底の基盤としているのか（しかし歴史は人類の好むと否とにかかわらず自と冷酷な審判を下すであろう）。宗教学（神学）はこの重要な人類の問題に答え得るか否か。

もし「歴史の審判者」が人類にとって不幸な結果を導く危険性が存在することが確証されたならば現代の諸科学はいったい何をなし得るのか。まさにこの意味においてのみ現代の方法論が問い直される意義があるであろう。

今回の大学院共同セミナー「諸学の系譜と真理愛」に参加して学際的雰囲気の中で強烈な問題意識を喚起させられたこと、様々な御専門の諸先生及び諸兄との出会いがあったことを非常に嬉しく思うとともにセミナー・ハウスの方々に対しても感謝致します。

❷――横浜国立大学M2　青木　幹喜

いくつかの課題を持って、セミナーに参加したのですが、果たして、その課題に対して今回のセミナーの各討論・議論が、どれだけ影響を持っていたのか、多少の時間の流れの中で、自分を見つめる必要があると思います。

課題に対する解決への視点を発見した驚きは、あまり感じられなかったように思います。しかし、三〇校近い大学からきた仲間たちの活発さ、問題意識の多さ、熱心さには、普段、院生室に閉じこもり、特定の仲間と生活してきた自分にとって、驚きであり、時には気遅れすることもありました。

さて、このセミナーに参加する当初の動機は、次の二点がありました。第一が、科学と宗教の関連です。絶えず自己と客体化した対象を追っていく科学と、主体・客体の問題では論じられない宗教は、相いれないのではないか。相いれるとしたら、真理という抽象的なもので結びつけるだけでよいのか、という疑問です。第二に、ウェーバーが生涯苦労したと言われる、客観性と価値の問題です。対象をありのままに見つめることと、自分の価値観をどう結びつけようかということです。多くのウェーバーの解説書や、書物を読んだ知識に、若干の自信を持ちたいという願いがありました。

非常に大きな課題に、わずか三日ばかりの間に、明解な結論を得ようというのは、虫の良すぎる話でありますが、それでも何か不満なものが残ったのは事実です。

第一の課題、宗教と科学の連関では、山下幸夫教授の、大塚史学から何を学んだのかというお話しで、非常に明解に述べられていました。大塚久雄氏の数々の著作にも、自分としても多少ふれてきたつもりですが、真理を追求する姿勢として、宗教と科学の闘争性を解決させていることが、この課題のひとつの視点であり、解決ではないでしょうか。しかし、前田教授のお話しの中にもあったのですが、人間の論理ではわりきれない、あきらめと、それでも理性でもって真理を探求していく、積極性との間で、学問をするということの、矛盾性をどう自己で受けとめていくのかという説明なり、体験談が欲しかったと思います。

第二の課題に対しては、ほとんど解決視点を与えられずにがっかりしております。これだけ様々の分野からの仲間たちがいる中で社会科学特有の方法論を論ずることが難しいのか、論点のしぼり方が悪かったのか、様々の理由があると思いますが、各個別分野での方法論を議論した上で、真理愛という大きな流れへ持ちこめばよいと思いました。

❸――早稲田大学D1　柏木　成章

私は特に一般的な方法論ではなく、従来全く疎かった神学について知りたくて参加した。幸いに前田護郎・塚田理両氏のお話を伺うことができ、プロテスタントの立場でのキリスト教理解と弁証の一端に触れることができ、少なからぬ収穫を得られたように思う。

前田先生は新約聖書学の権威として私が勝手に臆測していたような謹厳なイメージと全く異なり、軽妙洒脱な暖かいお人柄の方であるのを拝見して意外の念に打たれた。お話の内容もお人柄をそのまま映し出されたような、真摯な中にも人間への信頼を溢れさせるもので、聖書と現代科学技術の真理を「生命を長く健康に維持する」との見地で統一して把握されているのには深い感銘と多少の羨望をさえ感じたことであった。

塚田先生からは神学ご専攻の立場から、まさに私の期待していたキリスト教神学への興味に対応するお話を十分に伺うことができた。とりわけ全体集会の最後に触れられた新しい神学の潮流としてのプロセス神学のご紹介は興味深く、その源流とされるホワイトヘッドの思想が、仏教的な因果・縁起の理法と甚だ類似する点があるかに見えることなどは、全く知らなかった事柄であって、私が若干抱いている宗教への関心の中でのキリスト教・仏教対比の問題ともつながるように思え、今後考えるひとつの大きなよすがとなる知識を得られ、意外な収穫と喜んでいる次第である。

参加された方々に学部学生の方が割合多かったのも若干意外であったが、私より何歳か若い世代の切実な関心を直接知ることができ、勿論互いの見解に相当の隔たりはあったように思われるものの、ふだん閉じこもりがちになる自分への大きな新鮮な刺激とすることができ、かえって幸いであったようである。

しかしあえて希望を述べるなら、今後大学院セミナーをさらに開催される場合には、今回の主題より一段と明確に限定したテーマを定め、新進の研究者相互の出会いと切磋琢磨の場としての形成に十分考慮を払われるようなものを強く推進される必要はやはりあろうかと思われる。とりわけ大学院でも博士課程乃至それに近い高学年の層の交流の場が開けるなら、今回のものとはまた異なる独自な大きな価値を持ち得る可能性があるのではなかろうか。わが国大学全体の通弊とされる徒弟制度的師弟関係（勿論悪いところばかりではないが）に対し、専門の職業として研究生活に入ろうとする若い人々が各々ときとして孤立的に抱かざるを得ない悩みや迷いが、同世代間の横のつながりによって少しでも改善され、さらには互いに協力して次代の日本の第一線の知識をになうとの連帯意識が生まれるなら、日本の鍵を握る頭脳資源の開発に果たす役割は決して小さくあるまい。知識の交流というもつづまるところ人の交流にになわれなければ力あるものと成り得ない。互いに異なる立場のものが真摯に相互への関心を抱くとき、新たな学問の誕生も自ら約束されよう。

第103回大学共同セミナー

主題――空間と人間生活

――自然・人間の適正規模――

期日――昭和54年7月13～15日

＜全体講義＞

空間と人間

京都大学教授　吉田光邦氏

＜セクション演習＞

A　過疎と過密の人類学

香原志勢氏（運営委員）

B　生きられる空間――空間の精神病理と社会病理――

筑波大学教授　小田　晋氏

C　他者との適正距離と行動――過密感の問題も含めた――

東京女子大学教授　中村陽吉氏

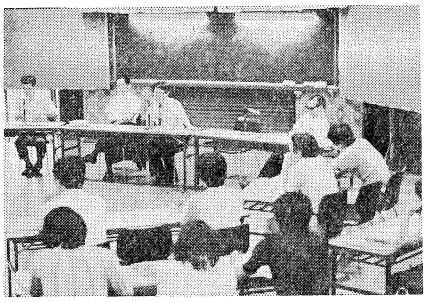
D　人間と空間

人間尺度――人間と空間を結ぶもの――

早稲田大学教授　戸沼幸市氏

都市と住生活環境

東京工業大学教授　谷口汎邦氏（運営委員）



共通セッション――左から香原，中村，小田，戸沼の諸氏

＜参加学生＞64名（内女子19名）

早大(10)、東大(8)、東工大、明学大(各5)、筑波大(4)、共立女大、東女大、武蔵工大、立教大(各3)、お茶の水女大、慶大、ICU、日女大(各2)、秋田大、東北大、千葉大、名大、京大、芝浦工大、聖心女子大、東経大、法大、武蔵大、明大（各1）、その他1　計24校

◇　◇

〝適正規模〟が共同セミナー委員会の席上で話題となったのは、昨年11月のことであった。話題の口火を切られた谷口汎邦氏に香原志勢氏が加わられて企画が練られることになった。

そもそもの発想は、高密度の都市空間が人間生活に及ぼす影響を探ることによって、そこに都市の適正規模が考えられないだろうか、ということであったが、このことは自然と人間との調和をどこに求めるか、という極めて大きな問いをわれわれに投げかけている。現代の科学技術は自然のシステムに介入して、その微妙で精緻なバランスを壊しつつある。われわれは地球という有限の空間の中では、もはや無限の感覚で生活することは不可能である。

このような問題意識から、今回のセミナーでは上記のように四つのセクションが設けられ、それぞれの分野から空間と生活とのかかわり方を適正規模という観点から探ることを試みた。したがって企画に当たっては、当初から人間の社会的生活というシステムの中の問題はあえて取り上げず、政治、経済等の社会科学における適正規模論は、次の機会に譲ることになった。

◇　◇

セミナーの冒頭に行われた吉田光邦氏の全体講義「空間と人間」は、空間を一つの表象としてとらえ、それを〝人間の経験の蓄積を繰り込んだ場〟として考える、即ち〝観念としての場の実体化〟を試みた壮大な空間論というべきもので、①自然空間、②人工空間、③表現空間、に分けて、それぞれについて東洋とくに中国と西洋を対照させながら、縦横に論理を展開され、体系化された該博な知識と鋭い分析力で学生を完全に魅了した。

二回にわたって行われた指導教授全員による共通セッションは、極めて凝縮した密度の高い全体講義に比べ、多少まとまりに欠けるという印象は免れなかったが、四つの分野のアプローチの仕方、ものの見方を通して広い視野が与えられたことは確かなようであった。焦点の拡散は最終日の全体集会にも持ちこされ、「結論と言わないまでも、もう少し方向性が欲しかった」という声が多く聞かれたが、このことは取りも直さず、人類学、精神医学、心理学、建築学の各分野において、まだ適正規模が極めて新しい問題関心であることを示すものであろう。

◇　◇

今回の参加者の特徴は、セクションの志望にバラつきがなく、ほぼ同数の構成になったこと、参加者の専攻のバランスが人文、社会、自然にわたっていたこと、四年生が最も多く、次いで三年生、大学院生の順で高学年の参加が圧倒的に多かったことがあげられる。応募理由にはこれを反映して卒論のための〝ネタ探し〟や自分の研究課題に対する一つの手がかりを得るため、といった明確な問題意識が伺われた。

また夏休みの幕明けにふさわしく、秋田、東北、名古屋、京都、といった遠隔地の大学からの参加があったことも付記しておきたい。

◇　◇

昨年の第98回共同セミナーと同様に、やはり運営委員を務められた谷口氏の発案で、今回も定められたテーマを一言で表現するという課題が出され、参加者は「空間と人間」をめぐって、その着眼のほどを競った。選考の結果、次の五つが選ばれ、入選者には指導教授から提供された五冊の著書が贈られた。

◇　◇

▽人間は自らの経験の下に空間の概念をつくっていく。そして絶えずそれとのかかわり合いについて悩む。しかしその苦労にもかかわらず、空間は自らの死とともに消滅する。空間の成立は生きていることの証である　▽空間の中に住む人間が、空間を意識することの意外に少ないことを発見した　▽間を味わうこと――陸から海へ発

（7ページ5段目へつづく）

第7回九大学合同セミナー

主題――冷戦研究

――そのアジア的特徴――

期日――昭和54年6月29日～7月1日

昭和48年から毎年開催されてきた八大学合同セミナー（慶応、成蹊、津田塾、聖心女子、一橋、上智、ICUの七大学で発足し、第2回から明治が加わる）は、今回新たに神奈川大学を加え、「九大学合同セミナー」と改称されて、この6月に開催された。

宇野重昭（成蹊）、細谷千博（一橋）、三輪公忠（上智）、池井優（慶応）の四人の教授が提唱した国際関係のこの合同ゼミは、第1回から第3回までは共同セミナーの形で進められ、第4回からは自主ゼミへと成長した。今回も学生の実行委員が組織され、テーマ設定、企画運営に至るまで学生の手で進められた。参加者は半年間に十数回に及ぶ勉強会を経てこの二泊三日の合宿ゼミに臨んだ。

前記の先生方をはじめ、この合同セミナーのOBで講師や大学院生となっている先輩の指導も得るなど教授陣には大変恵まれ、よき伝統の上に今回は永井陽之助東京工業大学教授を迎えるなど、実行委員の奮闘ぶりもうかがえる。

＜参加学生＞　101名

帯連載 ことばとこころ

利用者、千人会員の方々から寄せられた館長宛の書信から、刊行物の反響、温い励ましの感想などを拾わせていただきました。

「大学共同セミナー一〇〇回の歩み」を見て

①「大学共同セミナー一〇〇回の歩み」有難く拝受。往時を顧みて今は亡き創設当時の故人を偲び感慨深きものがあります。創設以来の貴台のご努力を想起し深く感謝致します。　森戸辰男

②ただいま「大学共同セミナー一〇〇回の歩み」を拝受いたしました。七〇ページの立派なもので、今更ながら飯田館長の大変な御苦労を偲んでいます。まことに微力ながらも小生も僅かのお手伝いができました段、心から喜ばしいことと存じ上げます。また何かお役に立つことがあれば、お声をかけて下さいますように。館長の一層の御自愛、御健勝とセミナー・ハウスの御発展をお祈りしつつ。　筑波大学　三枝充悳

③「大学共同セミナー一〇〇回の歩み」有難うございました。ただ思い出になるだけでなく、各セミナーの主題、お顔ぶれ、参考文献を読み直すだけでも勉強になります。積み上げられた貴重な足跡の記録を楽しく見させて頂きました。　学習院大学　児玉久雄

④このたびはセミナー・ハウスの歴史が鮮明にわかる「大学共同セミナー一〇〇回の歩み」を御恵贈いただきまことに有難うございました。一時企画委員会に顔を出していた頃を思い歳月の流れを想い起しております。　立教大学　住谷一彦

▼交友館落成に際して御寵招に預り真に光栄で御座いました。洵によい環境の中に素晴らしい、いこいの場が出来、さぞかし皆さんもよろこんで居られるでしょう。小生先日キリンビールを訪ね佐藤会長に報告と礼とを致しました。　三菱総研社長　中島正樹

▼御親切な御便りを頂きましてうれしく拝読いたしましたが、八王子に、小石川からいったハギが順調に育っている様子、想像して楽しみにしております。将来セミナー・ハウスにも植物園ができれば、楽しいことだなどと考えております。　琉球大学　古澤潔夫

▼セミナー・ハウスの内情については詳しく存じませんが、創設の当初から学生を愛し、大学への夢をもって、心身を労してこられた飯田さんが、どんなに悲しく寂しく思っておられるだろうかとお察ししております。　北海道　西村秀夫

▼いろいろとご苦労の多かったことを知りました。とにかくご苦労のことは想像申上げます。創造の大業を遂行された館長の夢は、多摩の丘に年々ふえてゆく樹々と同じように、いつまでも育つのをやめないでしょう。

どうぞいつまでもお元気で丘にのぼってくる学生たちにコーヒーをおごってやって下さい。　法政大学　山本　満

▼岡山猛さんから専務理事就任の御挨拶状をいただきました。よきパートナーを得られたことと存じます。先生の理想のアカデミアの実現に向って力をあわせて前進して下さることをお願いいたします。　亜細亜大学　板垣興一

▼御丁寧な会費領収恐れ入りました。運営が苦境にあるとか、御苦労の多いことですが、我々にとっては、かけがえのない施設ですので、是非今まで以上に発展するよう御尽力下さることをお願いします。　東京都立大学　児玉昭太郎

▼この度は私の会費納入に際して、御直筆になるお葉書をいただき大変恐縮に存じます。洵に有難うございました。セミナー・ハウスはいつも活気に満ちて美しく、先生の御熱意には頭が下がる思いが致します。ニュースも、いつもできるだけ詳しく拝見させていただいております。　中央大学　林　泰造

▼昨年千人会員の一員に加えて頂き一度、ハウスを利用したいと思っていましたが、今回念願を果しました。学生達十数名と夜更けまで討論に花を咲かせ有意義な一時を送ることができ、ハウスが果している役割を痛感した次第です。　東京工業大学　飯島泰造

▼毎日毎日が楽しくて仕方がない様な飯田さんの御様子に接し同慶の至りです。秋になったら同僚諸教授にもハウスを推賞するつもりです。　駒沢大学　寺中良二

▼先日は、はじめてセミナー・ハウスに行ってみて設備とその他の整っていることにびっくりしました。とりわけ帰るときに館長にお目にかかれたことが何よりもうれしいことでした。人生における最大の歓びは「邂逅」だという言葉を思い出しました。　駒沢大学　石井修二

▼セミナー・ハウスを最後に訪れてから十年を経ました。その後、益々御発展の趣一度参視致したく存じながら仲々機をえません。この春「純粋理性批判入門」なる一書を出しましたので、図書室になりとおき願い度くお目にかけます。

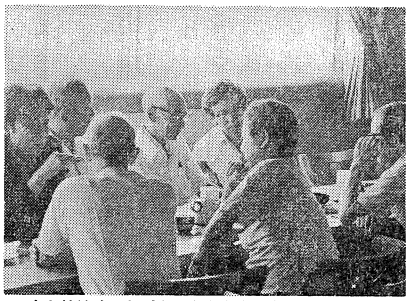
うつむきて秋思は深しカント像　離葉

▼今年からB会員にして下さい。誕生カードをお贈りいただき、ありがとうございました。

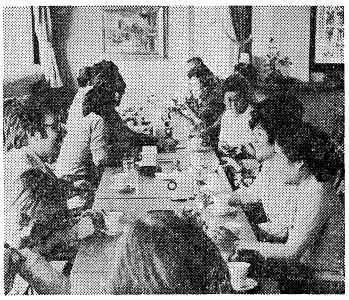
さて私は勤務先の法政大学で過日永年勤続の表彰をうけました。そのときの金一封の中から五万円を贈らせていただきますが、無名氏扱いに願います。　法政大学　無　名　氏

▼私の頭の中には御健康で活動していらっしゃる先生のお姿しか思い浮ばないので、胃の手術をなさったことには結びつきません。先生も六九歳、どうぞお気をつけて下さい。私も今年は四〇歳です。私なりに忙しく思うように時間がとれませんが、それでも年に一、二度程度なら共同セミナーのお手伝いができるかも知れません。

まだ一人で書くまでには至っていませんが、青木教授と共著で、「工業力学」を出しました。図書室の片隅にでもおいて下さると光栄です。くれぐれも御大切に。　東京工業大学　長松昭男



交友館歓談尽きず①―山内先生の喜寿を祝う人々



交友館歓談尽きず②―ICU語学科新入生オリエンテーション

（前ページよりつづく）

想の基盤を移す　▽人間的空間をつくるには、その中に人間が介在しなければならない。空間の中に人間がいるのではなく、人間が空間をつくってゆくべきである　▽空間は人間を必要としてはこなかったが、人間は常に空間を必要としてきた。

◇　◇

〔編集者注〕　指導教授のお一人である戸沼幸市氏は、一七年前、当ハウスの初期の設計に携わられた方である。8頁に氏の一文を別掲した。

泉 雨 名 美 輔
1965－1978

『建築文化』九月号の大学セミナー・ハウス特集

前号の館長日記がすでに触れていたように、『建築文化』九月号には当ハウスの建築の全容が36頁にわたり特集されている。その中から一部分を抜すい、または転載して、「セミナー・ハウス・スピリット」が建築の中に具現化されてきたプロセスの一端をご紹介したい。早くも工学院大学学長伊藤鄭爾氏が次のような〝読後感〟をお寄せ下さった。

＊　＊　＊

建物群と「人間」
――私はこう見る――

伊藤ていじ

『建築文化』誌の一九七九年九月号に「大学セミナー・ハウス」が特集されている。もちろん取りあげられているのは、建築的側面である。約二万坪の起伏のある土地に、六三年から七八年にかけて造られた建物群。本館・宿舎・セミナー室から国際セミナー館・交友館にいたるまで数々の建物が整備され、この事業を推進した人の執念と理想を感じとることができる。そしてたしかにそれらは地形の中に巧みに配置され、乱雑な配置のようにみえて機能的には楽しく連結されていることは理解できる。

しかしその造型はどうなのか。よくいえば逞しくエネルギッシュでユニークで、悪くいえば、その多くは醜悪で洗練されているとは思えない。アール・ヌーボーの出来そこないみたいな手すりにふれて眺めていると、何もわざわざ面倒な形やディテールにしなくてもよいのに、知的な遊びもほどほどにと言いたくなる。ところがここでは、良くも悪くもそれが取柄で個性の根源なのである。

もしこれらの建物が、セミナー・ハウスの理念を表現しているとしたら、それは何なのか。くさび型の本館が大地につきささって忘れられない恰好しているからといって、それは単なる思わせぶりではないのか。ただ私はこれらの建物群をみて「人間」を感ずる。町にあふれたビルやアパートと比較すればよく分る。そして人間が教育の根源にあるとしたら、これはセミナー・ハウスの建物として容認することができる。

奇妙なことにこれらの建物は、どのひとつも同じ形態のものがなく、荒々しく土着的なものから少しゃれたものまで組みあわされ、破綻しそうで破綻せず、統一と変化を感じさせる。それが可能となった主たる理由は、この十五年間に樹木が成長したからだと思う。要するに緑の中で活発に行なわれている歴史の連続があって、これらの建物は見られる存在となり調和を保っているのである。

ことばから姿へ
姿がことばに

吉阪　隆正

母親は自分が子を生んだのだと思いがちだ。建築についていえば、設計者は自分が母親のようなものだと思っている。しかし、それには父が必要だ。施主がそれに相当する。大学セミナー・ハウスはいい父をもった。お蔭で一九六五年7月、五体満足な姿で誕生、本館、サービスセンター、中央セミナー館、居住ユニットと各セミナー室とが出来上がった。二年後に図書館と講堂が、その翌年教師館として松下館やテニス・コートが加えられて、一応一通りのものが揃った。外の世界では大学紛争で荒れていたとき、大学セミナー・ハウスは逆にスクスクと育って、活動内容は世の評価を受けるようになっていった。

セミナーということばが、大学内のゼミとは別の意味をもち出した。各地にセミナー・ハウスという名のついた施設がつくられるようになった。しかし父親が違い、母親も違っているので、いろいろなセミナー・ハウスとして、日本各地に育ち始めた。（中略）

一五年前に素朴だった一つの活動は、年輪を加えるに従って豊かさを増した。まるで兄弟姉妹が賑やかに楽しく語っているようになった。もし一気にこれだけのものを求められたら、あまりに一本調子に統一されてしまったかも知れない。一人っ子の淋しさになったかも知れないと思う。

U研で中心になってくれた人、通過する折りに携わった人、それらの手が加わって、多様さをもちながら、父母の筋が一つにつないでいる。これは幸せなことだった。そのような機会の与えられたことを心から感謝したい。そしてセミナー・ハウスという新しいことばを日本語の一つに加え得たといえるだろうか。（三三頁より一部抜粋）

大学セミナー・ハウスとは何か

館長　飯田宗一郎

大学セミナー・ハウスが地上に出現するまでには、長い準備期があった。昭和40年7月5日（一九六五年）の開館までの七年は、「セミナー・ハウス」の理念をはぐくんだ胎動期であった。

私はしばしば「セミナー・ハウス」のような施設は、どこか外国にもあるのですか、と聞かれる。構えた言い方になるけれど、「セミナー・ハウス」のカタログは、世界の何処にもなかった。「セミナー・ハウス」とは、私が理念を表現すべく考えぬいた末に創った新造語である。

大学の現況を至近距離から観たものでなく、現実の深層に入って、最も原理的なものを現代に回復させることを目差したのが「セミナー・ハウス」であるということである。（中略）

「セミナー・ハウス」はユートピアである。その理念を盛るのが建築である。創意に富んだ設計が望ましい。場所としては、時間的にも距離的にも郊外にある静かな自然がよい。以上のような視点に立って早稲田大学建築科教授吉阪隆正氏と同教授の主宰する研究室に設計監理を依頼した。設計のユニークさと相まって、「セミナー・ハウス」の革新性が発揮されたことは疑いない。

多摩は古い土地である。私は新天地を求めて多摩丘陵の峯々に登った。旧中山部落に近い丘陵の一角に雑木林を今に残している約二万坪の土地を探しあてた。ここを敷地に決定したことをいまも悔いていない。（三四頁より一部抜粋）

企画から第一ブロックプランまで

戸沼　幸市

野猿峠の丘陵地に、二百人までの「教授と学生の交わりの家――大学セミナー・ハウス」設計依頼に関して、飯田宗一郎さんから話があったのは昭和37年11月19日のことであったらしい。

「話があってから、設計を正式に契約するまでの最初の四ヵ月は、だいたいひとりぐらいを手元において、問題のときほぐしと再構成ということが行なわれている」とは、大学セミナー・ハウス建設に関する吉阪先生の日誌の一節である。その「だいたいひとりぐらい」が、当時大学院生であった私で、以後第一期建設まで、U研究室において下働きをさせていただいた。あのころは、吉阪先生と飯田さんはしばしばごつくぶつかり合っていたのを覚えている。

さて、私に与えられた最初の仕事は、問題を建築的量に置き換えることであった。まず人びとの集合レベルを一人、二人、五人、

（9ページ4段目へつづく）

事業部だより

●6・7月の利用概況

前号に記載のとおり、新年度4・5両月は各大学が相次いで実施した新入生のオリエンテーションで、この丘は連日活気に溢れたが、この新入生の大型合宿はさまざまな形で6月も続き、7月中旬、毎年夏休みに入ってすぐに実施されるお茶の水女子大の全館使用による新入生セミナーで終止符が打たれた。そして、同月の後半からは夏休み型の利用が多くなり、常連の大学英語教育学会などの語学研修グループ、日米学生会議に代表される国際集会などの滞在で、当ハウスの利用は一年中で最もバラエティに富み、また全国的、国際的広がりを持つ時期に入った。

両月の利用を数字で示すと、6月がグループ数六四、宿泊延人数三、六四一人、7月がグループ数一〇三、宿泊延人数五、六〇一人である。

白梅学園短大保育科新入生オリエンテーションのひとこま

●〝新入生シーズン〟の閉幕

6・7両月中に利用したグループは別掲「利用状況」にあるとおりであるが、大型の新入生合宿を実施したのは、都立大法学部、国際基督教大語学科、東京学芸大数学科、日本女子大家政経済学科、白梅学園短大保育科、東京学芸大化学科、同保健体育学科、文教大女子短大部英語英文学科、明治学院大社会学科（二部）、津田塾大数学科、お茶の水女子大文教育学部、同理・家政学部であった。

このうち白梅学園短大とお茶の水女子大は、今年も前後二班に分かれ、全館使用による合宿を行った。白梅学園短大と文教大女子短大部は、ともに二泊三日でゆとりのある日程を組み、前者はテニスコートを利用して恒例の〝運動会〟を実施している。明治学院大社会学科（二部）は昼間働く学生のために土曜夜から日曜午後にかけてフレッシュマン・オリエンテーションを行い、学生八四名に対して教師一六名が参加、密度の高い交流の機会としている。

前記のように、お茶の水女子大の新入生セミナーは、この丘の〝フレッシュマンの季節〟の終了を告げる年中行事となっている。7月11・12日には文教育学部の一〇学科二一八名（うち教職員二二名）、同12・13日には理・家政学部の八学科二〇九名（うち教職員二二名）、計四二七名。参加はいずれも自由意志によるが、ほぼ全員が参加を希望するとのこと。夏休み帰省前の合宿で、入学以来三ヵ月の学生生活を〝総括〟する機会でもあろう。参加者から寄せられた感想の中にも学生としての自覚がうかがえた。

●当ハウスの施設と自然をフルに活用――ICU語学科のキャンプの例から――

国際基督教大（ICU）の語学科が6月上旬、初めて当ハウスで行ったフレッシュマン・オリエンテーション・キャンプは、当ハウスの施設、自然環境、さらに限られた時間を最大限に活用して成功した合宿の好例である。ここにその一端を紹介し、今後同様の合宿を企画される際の参考に供したい。

このキャンプには上級生数名を含む学生男女八四名に、外国人助手を含む同学科教職員計三七名中実に三一名が参加した。文字通り同学科全員が一体となり、家族的雰囲気に満ちた合宿であった。

「入学後二ヵ月を経た時点で、大学生活の現状を話し合い、今後四年間の生活の中で進むべき方向を考えさせ、また語学科生として互いに知り合う機会とする」ことがこのキャンプの目的であり、このために、少人数でのグループ・ディスカッション（ICU生としての現状や問題点、精神生活、日常生活などを討論）、専攻別の四年生によるシンポジウム（専門コースの内容、各コースに進むうえでの準備と心構え、苦労・失敗・成功談、卒業後の進学・就職などに対する先輩としてのアドバイス）、教授訪問（自由に教師の部屋を訪ねて話し合う）――などが行われ、これに相互の親睦をはかるための各種のレクリエーションが組み入れられている。

一泊二日の日程ではかなりの強行軍と思われる盛り沢山のプログラムであるが、これを効率よく消化して「充実した共同体験」とすることができたのは、極めて自主的かつ積極的な動きを見せた一二人の実行委員の学生と担当教師との意気の合った協力、そして下見と打合わせのための当ハウス訪問を含む周到な事前の準備があったからであろう。さらに、当ハウスの屋内と野外とを上手に利用したこともこの合宿を成功に導く重要な要因となっている。

初日到着後の導入部が、まず手際よく見事であった。講堂でのオリエンテーションと入宿を機敏に済ませると、その数分後には教師・学生全員がテニスコート下の広場に集結していた。青空の下みどりの草の上に大きな輪がつくられてグループ・ゲームが始まると、そこには早くも打ちとけた空気が流れていた。

夜のキャンプファイアーも盛り上がった。そして二日目の朝はオリエンテーリングを実施している。教師を含む数人ずつのグループが、当ハウス構内にあらかじめ

（前ページよりつづく）

一〇～一五人、二〇～三〇人、五〇人、二〇〇人と区分し、それぞれに建築の集合レベルを想定した。二〇〇人集合は本館大食堂に、五〇人集合は中央セミナー館に対応させたが、一人から二〇～三〇人の人数集合は建築に直訳というわけにはゆかなかった。

吉阪先生は個人が基本だと、宿舎も一人対一戸を独立に指示されたが、ちまちまとなり過ぎ、曲折の末、二人で一ユニットにすることとなった。敷地の関係で、この一〇〇ユニットが七群に分けられ、一群（九～一七戸）に対して小、中セミナー室が付設された。サービスセンターや洗面所も宿舎群に見合って分散配置されたが、初期のころは吉阪先生や大竹十一さん、松崎さんを囲んで他の室員ともども、人間の交流論議に花を咲かせたことであった。それにしても、U研究室は非権力的な分散型が好きであると思う。そのユニット群も現在の姿になる直前の案は右側の谷にカスバ型に圧縮されて計画されていた。ある朝、私が研究室に入ると、待ちかねたように先生から電話があり、宿舎は中央尾根筋にばらまくべしと突発的に申し渡された。その日から傾斜面になじむように、幾度もレイアウトをし、最後のころは目をつぶると等高線が頭に浮かんで仕方なかった。

U研究室の設計は相当に煮つまった案でも、しばしば一夜にしてひっくり返ってしまう。本館の逆ピラミッドもその一つであった。最終の基本設計案（藤棚案）がほぼまとまり、施主に示す約束の日が数日先に迫っていたそんなある日研究室に来てみると、粘土の敷地模型の本館の位置に、ボール紙でつくられた逆ピラミッドが一つぽつんと置かれてあった。それは現在のきつい楔型よりも、ずっと偏平のものであったのだが。

（三四頁より全文を転載）

設定されたコースと関所を巡り、ともに歩きともに考えてチーム・ワークを競い合った。「自然に最も密接なスポーツ」といわれるオリエンテーリング（または歩行ラリー）は、当ハウスを利用して行われる社会人の研修に最近ではしばしば採り入れられているが、この丘とその周辺の立体的な地形と自然の環境が「このプログラムに求められる諸条件をそなえていて最適である」といわれる。また、今回のキャンプに参加された教師のお一人は、「ICUのキャンパスも自然に恵まれているが、多摩の丘は起伏に富み、その空気は三鷹よりもずっときれいでおいしい」といっておられた。今後各大学が合宿の効果を一層上げるために、当ハウスの施設とともに、この丘の自然の豊かさをこのように活用されるよう期待したい。

（なお、このような利用とプログラムのご相談に出来る限り応じるようにしておりますので、事前の下見を兼ねた当ハウス訪問をおすすめいたします。ご来館の際は、あらかじめご一報下さるようお願いいたします。）

●日曜から月曜にかけての合宿はいかが——東京学芸大と中大の利用の例から——

他の類似施設と同様、当ハウスも週末の利用率は年間を通して圧倒的に高い。特に土曜日午後から日曜日の午前にかけては各大学のゼミ合宿等が集中、その予約は数週間も前から満杯ないしそれに近い状態となることが多い。

そこで、これはすべての方々にとって便利であるとは思えないが、当ハウスに比較的近距離にある大学の方々には、日曜から月曜朝にかけての次のような合宿も可能であることを知っていただきたい。週末の利用者は日曜の昼食をもって退館することが多いから、日曜午後からの予約はずっととりやすい。無論日曜の昼食から始めていただくのもよい。そして月曜は多摩の丘から大学の授業へ、これも固定的な通学パターンを変えて、時には新鮮な経験ともなろう。野猿街道も新しく生まれ変わり、路線バスの運行回数も以前に較べて多くなっているし、場合によっては当ハウスのマイクロバスもお手伝いできる。また、必要とあれば、食堂では月曜の昼の弁当を用意することも可能である。

6月の中旬に、中央大法学部の新入生六三名が「一年大合宿をやろう会」で、また東京学芸大保健体育学科新入生三〇名（波多野義郎助教授）が「クラスの親睦を兼ねた研修」で、ともにこの週末をさけた利用を試みられた。新入生合宿の場合は、その実施の時期を遅らせることが出来ないことから考え出された一策であるが、月曜朝の登校もスムーズに行って好評であった。中には自転車で「野猿峠からサイクリングで登校」という元気な学生もいた。

新しい利用の仕方として、ご参考にしていただきたい。

●夏休み利用の諸集会から——今年も常連のグループを迎える——

7月中旬以降には、毎年この丘に夏休みの〝季節感〟を運んでくる常連グループの再来がある。まず大学関係では、大妻女子大英文学科の「英語特殊演習」。学生六七名が参加、六名の教師により、今年も四泊五日の日程で「英語を聞き、話す技能を養うための集中訓練」を行った。杉野女子大短大部被服学科の「教育原理ゼミ」は今回も計二五名が長期研修館で七泊。毎年夏休みのこの合宿は、学習の合間に意識的にレクリエーションを織り込んで学習そのものの効果を上げるようにしている。炎天下、学生に混ってテニスで汗を流す田村皖司教授、花火で夕涼みを楽しむ学生の姿も印象に残る。

京浜女子大の一七五名が三泊で行った生物学ゼミ「多摩丘陵の生物の生態観察ならびに特講」は今年で二回目であるが、すでに来年の予約もして帰られたので、これも当ハウス夏の恒例行事となろう。同大学生物学研究室牧林功助手は昨年当ニュース57号の紙上で、豊かな自然に恵まれた当ハウスが動植物の観察に好適な環境と設備をそなえていることを指摘しておられたが、その後同研究室は指導に当たられた東京薬科大の坪井実教授を通して、その時の観察の一部をまとめた報告書「多摩の丘の昆虫」を当ハウス図書館に寄贈して下さった。

国際セミナー館をフルに活用し、二週間にわたって行われた大学英語教育学会（JACET）の第13回夏季セミナーには、全国各地の大学の英語教師、米国Rutgers大比較文学科主任教授John McCormick氏など外国人講師数名、計四七名が参加、開会式には例年のように明治学院大名誉教授高橋源次氏、閉会式には同学会会長小川芳男氏も来館された。なお、三年前第10回セミナーを記念し、小川会長への感謝をこめて教師館前庭につくられた〝小川ベンチ〟が、そろそろ修復を要する状態になっていたところ、今回のセミナーの参加者から修復費の一部にと寄付金が集められた。

日米両国交互に毎年開催される日米学生会議（JASC）は今回で第31回目。今年は日本開催の年、当ハウスでは一九六九年以来連続六度目の開催となる。参加者八九名（うち米国人学生四二名）は7月29日当ハウスに到着、8月5日までの八日間滞在した。今回は、8月2日から当ハウスで開始された日本国際学生会議（ISA）主催の第26回国際学生会議（参加者はアジア諸国からの学生三七名を含む一二四名）と同時進行の期間を設けて合同プログラムを組み入れるという画期的な試みもなされているので、その辺の模様を次号でお知らせすることにしたい。

●キャンパス点描

6月3日＝夕食時に五グループ一一八名が交歓。西宮輝明早大教授と同ゼミに参加のギリシャ人E・デドウシス氏のスピーチ、相馬順一桜美林大教授の独唱、全員の合唱など。長期滞在中の郵政省貯金局の四三名も学生との交流を楽しんだ。

6月15日＝共同セミナーでも指導され、近くハーバード大客員教授として渡米される外務省参事官小和田恒氏がお別れに来館。当日在泊の七グループ一三九名に夕食交歓会でスピーチをされた。

6月22日＝四グループ一一四名が夕食時の交歓会に参加。早大吉阪研（漁村ゼミ）、早大加藤研、神奈川大堀野（人間工学）ゼミの理工系三グループがそれぞれの研究内容を紹介、堀野定雄助教授が滞在中の相互接触を呼びかけた。

6月24日＝夕食時に第1回大学院共同セミナーを含む五グループ、計一五大学の一〇三名が交歓。前田護郎東大名誉教授のスピーチ

◆野猿峠の今昔

「野猿峠には、昔、猿がいたのですか」と問われることが多い。その名の由来を由木村に住む古老にたずねてみた。

この峠は、昔、申丸（サルマル）峠と呼ばれていた。なんでも申丸という人がここで仇討ちをしたと言われているが、その真偽のほどは定かでない。昭和の初期、野鳥料理の鎌田鳥山の先代が、商売の宣伝のために、申丸から申をもじって野猿峠と名づけたのが、そもそもの始まりで、たまたま東京都（当時は府）がハイキングコースにこの名を使ったことから、一般に知られるようになった。

その昔、峠のあたりは北の山上が街道になっていて、馬でなければ通れないようなひどい道であった。今でも地元の人々はこれを旧道と呼んでいる。明治の末に、この街道は少し南に寄り、大正15年には改修工事が行われて、頂上の切割りが下げられ、坂の勾配もゆるやかになった。旧道は馬と人が通り、新道となってからは荷馬車、手車、牛車、リヤカー、三輪トラックと移った。現在では、二年にわたる拡張工事で新道のおもかげもなく、多摩ニュータウンから八王子へぬける車が途絶えることがない。

（運来荘係　北沢高純）

●館長日記から

「建築文化」9月号が大学セミナー・ハウスを特集された。別に当方で依頼したものではない。U研究室が1965～1978にかけ、一貫して設計と監理を担当された大学セミナー・ハウスの総括的紹介と評価である、発行所は、この種の権威ある出版社彰国社である。いうまでもなく単なる自画自讃の出版でない。彰国社が取上げた意欲的な企画である。明年は開館十五年目に当たる。よい時に世に出た記念刊行物である。私はこの建築雑誌を手にして、これは「後世への最大の遺物」であると思った。それは何も設計をほめることでもなく、セミナー・ハウスの名をのこすことでもない。日本の大学教育史の中で大学紛争を論ずるとき、紛争以前にこの構想が生まれ、建物が出来上っており、紛争が発生して急速にその存在が高く評価されたこと、そのような時代を背景にして成長発展した経過をこの特集は克明に記述している。

◆この特集は、教育学者によるものでなく、建築雑誌記者の企画になるものである。彼等の眼がとらえたキャンパスの全容である。毎日見ている建物であり、風景である、我々が気づかないところを、「ここが見どころなのですよ」とカメラマンが教えている。私はそれに気づいてびっくりしている。セミナー・ハウスの理念を、実によくカメラが伝達している。創立の理念を永続させるSustainableためにも、この特集は「後世に永く遺したいセミナー・ハウスの記念物」である。◆9月4日、伊藤工学院大学長の来訪をうける。たのしい談話を交えた。「建築文化」を専門家として読まれた直後の訪問であった。その感想は別記の通りである。伊藤学長は、この丘には建物や樹木と共に人間があると、ずばり急所をつかれた。この観察は大学セミナー・ハウスに関する正解であろう。ニュース60号ほど私をせつなくさせたものはない。心配されて感想をよせて下さった読者の方々も、この「特集」が公刊されたことを喜ばれるにちがいない。◆今夏最大の盛事は、日加学術会議の会場となり、カナダとの修好五十年の歴史を共に祝うことができたことである。三〇〇人に及ぶ国際会議でした。当ハウスをこのように利用した最初のケースである。初代カナダ公使の姿が老いてなお美しかった。会長として主役を果たされた津田塾大学の馬場教授の手腕は、さすがである。立派な国際人である。◆8月19日、刻字書道の女流書家松原蕙秀先生の来訪をうける。書道芸術院長、故香川峰雲先生の高弟である。交友館に「長楽無極」の刻字の額をかけて下さった。ノミで文字を彫って書く書法がすばらしく立体的で美しい。交友館を飾るには、またとない贈りものである。香気を放っている。◆設計主任者・松崎さんの頭脳から、セミナー・ハウスの建物配置図が生まれたといってよい。私は幸いにして、この人と心違わずして生きている。「建築文化」の特集を手にして感を深くされているであろう。

など。

6月24日＝第4日曜恒例の遠来荘茶道教室を開催。利用者計四四名が参加。

7月6日＝夕食時に津田塾大数学科フレッシュマン・キャンプ（八七名）など当日の在泊グループ（国公私五大学一八五名）を紹介のあと、七夕の短冊を配った。当夜ゼミ終了後、在泊者は交友館に用意された笹竹にそれぞれの願いをこめた短冊を飾った。

7月14日＝夕食時に第103回共同セミナーを含む八グループ、計二八大学の一八三名が交歓。一番ヶ瀬康子日女大教授が当ハウス開館当時の模様を織り込んだスピーチをされた。

●寄贈図書

54年5～6月

「佐渡百話」　松井源吾殿
「国際交流」No.19　国際交流基金殿
「エナジー対話　明治メディア考」
エッソスタンダード石油広報部殿
「金融経済」No. 175「金融経済研究所五十年史」金融経済研究所殿
「日本思想史講座」8、「明治思想家の宗教観」　小泉　仰殿
「人間尺度論」　戸沼幸市殿
「採集と飼育」5～6月号　日本科学協会殿
「紀要」第12号　東海大学医療技術短期大学殿
「医学をみる眼」「笑い　泣く　性」
「新医学序説」「医療的認識の探究」　中川米造殿
「法学会誌」第29巻、「早稲田法学」第54巻、「人文論集」第16巻　早稲田大学法学会殿
「国語学五つの発見再発見」　水谷静夫殿
「追想正田建次郎先生」　武蔵学園殿
「早稲田フォーラム」No. 25　早稲田大学広報課殿
「択一　憲法の解明」「公法理論」　斉藤　寿殿
「政治経済史学」No. 152～155　政治経済史学会殿
「現代詩研究」　現代詩研究所殿
「内村鑑三と無教会」　田村光三殿
「自然観察の手引」第1・3・5編　坪井　実殿

●寄付金報告

54年7月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

＜一般寄付＞

三、000円　おさひめ幼稚園殿
一〇、000円　大学英語教育学会第13回夏期セミナー参加者一同殿

＜植樹基金＞

三〇、000円　明治大学教授　田村光三殿

＜視聴覚施設設備充実募金＞

吾〇、000円　第7回九大学合同セミナー指導教授一同殿
九、六四円　第7回九大学合同セミナー参加学生一同殿
三〇、000円　芝浦工業大学建築学科教授　橋本邦雄殿
一〇、四五円　第103回大学共同セミナー参加者一同殿
一五、000円　第103回大学共同セミナー指導教授殿
一四、000円　杉野女子大短期大学部教育原理ゼミ殿

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

6月＝三、六四一人
7月＝五、六〇一人

■6月

東京都立大学法学部新入生オリエンテーション　小池　正胤
国際基督教大学語学科フレッシュマン・オリエンテーション　竹内　啓一
東京学芸大学教授　村松　安子
一橋大学教授
東京女子大学助教授
東京学芸大学数学科新入生合宿　村田　好正
東京大学助教授
東京学芸大学講師　荒尾　禎秀
一橋大学教授　良知　力
早稲田大学教授　西宮　輝明
日本女子大学教授　松尾　均
早稲田大学教授＊　吉阪　隆正
東京都立大学化学科　桐敷真次郎
東京都立大学教授　山沢　逸平
一橋大学教授＊　丸尾　直美
中央大学教授　中山秀太郎
上智大学教授　松田　磐余
東京都立大学助教授　東川　清一
東京学芸大学教授　小口　正七
東京学芸大学教授　小田切松義
日本大学教授　波多野義郎
東京学芸大学助教授　関田　寛雄
青山学院大学助教授　奥平　康弘
早稲田大学講師
中央大学法学部一年大合宿をやろう会　水谷　謙治
立教大学教授　奥山　典生
文教大学女子短大部英語英文科新入生研修　加藤　栄一
東京都立大学教授　星野　昭吉
早稲田大学教授
津田塾大学講師

法政大学教授　五味　健吉
東京学芸大学教授　谷　俊治
東京都立大学助教授　水谷　三公
明治学院大学教授　高野　史郎
神奈川大学助教授　堀野　定雄
駒沢大学助教授　谷敷　正光
明治学院大学教授　宮野　彬
東京都立大学助手　田村　俊和
学習院大学教授　兵頭　次郎
神奈川大学教授　渡辺　精一
横浜市立大学教授　柳下　勇
桜美林大学教授　相馬　賢一
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション＊　郡山　正
女子美術大学教授
工学院大学専門学校教授　中西昌太郎
日本女子大学附属高等学校
日本学生経済ゼミナール東京部会
第87回大学共同セミナーBセクション
第1回大学院共同セミナー
日本キリスト教団教誨事業協力会
東京都立保育園園長会
上智大学カウンセリング研究所
郵政省貯金局
日本化薬
立川スプリング
東芝電気
小西六写真工業労働組合
ソフトウェアマネジメント
京王プラザホテル＊

予告

▼**第105回大学共同セミナー**
主題　日本人と〈家〉――新しい人間の絆を求めて
期日　昭和54年11月9日～11日
《全体講義》家の理念と実態
　東洋大学名誉教授　小山　隆氏
《ゲスト講演》私の〈家〉体験
　住家　加賀乙彦氏
《セクション演習》
A 家と家族（正岡寛司氏）／B 民家と村の生活（相澤韶男氏）／C 人間関係の確立への苦闘（熊坂敦子氏）／D 家の崩壊からの出発（鳥居邦朗氏）／E 生産の場としての家庭の復活（高須裕三氏）
《申込締切日》11月1日

▼**第106回大学共同セミナー**
―大内力先生の退官を記念して
主題　一九八〇年代の世界経済
期日　昭和54年12月7日～9日
《全体講義》
　東京大学名誉教授　大内　力氏
《ゲスト講演》
　信州大学教授　陽谷三喜男氏
《セクション演習》
馬場宏二（東京大学助教授）、佐藤経明（横浜市立大学教授）、森田桐郎（東京大学教授）、大内秀明（東北大学教授）の諸氏

▼**第1回大学院共同セミナー〈冬の部〉**
主題　諸学の系譜と真理愛――方法論の再検討
期日　昭和54年11月30日～12月2日
《全体講義》
真理を求める心
　東京大学名誉教授　前田護郎氏
《講話》人間を科学する道
　聖心女子大学教授　岡　宏子氏
《セクション演習》
A 科学と宗教―進化論をめぐって―（塚田理氏）／B 社会科学における客観性と価値（田村光三氏）／C ホモ・エコノミクス論再考（山下幸夫氏）／D 物理学とは何か(2)自然科学と人間性―（鉛木皇氏）

スリーボンド
【日帰り利用】
立川スプリング

7月

青山学院大学教授　小畑　耕郎
明治学院大学社会学部二部フレッシュマン・オリエンテーション
神奈川大学助教授　池上　和夫
神奈川大学教授　加藤　一昶
国際基督教大学教授　都留　春夫
成蹊大学助教授＊　下斗米伸夫
津田塾大学数学科フレッシュマン・キャンプ
学習院大学教授　大川　章哉
学習院大学教授　三橋　光
東京大学助教授　菊地　昌典
東京都立大学教授　佐藤　英男
芝浦工業大学建築学科八王子合宿ゼミ
東京都立大学助教授　石田　頼房
武蔵大学講師　都竹通年雄
慶応義塾大学教授　加藤　寛
一橋大学教授　深沢　宏
駒沢大学教授　武田　康
お茶の水女子大新入生セミナー＊
駒沢大学講師　福岡　政行
武蔵大学教授　佐野　晃
東京大学教授　斎藤　真
日本女子大学教授　一番ヶ瀬康子
東京学芸大学助教授　羽鳥　好夫
東京大学教授　関　寛治
一橋大学教授　久保　欣哉
東京大学教授　関口　忠
東京大学教授　六本　佳平
大妻女子大学英文科
法政大学教授　金山　行孝
東京大学助教授　恒川　隆男
法政大学教授　村上　直
東京外国語大学教授　竹内与之助
日本大学講師　栃原　敏房
東京大学教授　下総　薫
中央大学瑞法会
中央大学教授　山田　卓生
法政大学教授　田嶋　陽子
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京薬科大学教授　坪井　実
東京学芸大学助教授　野村　東助
早稲田大学教授　中村　英雄
東京都立大学助教授　田辺　良美
学習院大学教授　玉野井昌夫
東京都立大学教授　石村　善助
早稲田大学教授　関　嘉彦
東京電気通信大学教授　角田　稔
東京大学科学思想史研究会
東京都立大学助手　武内　和彦
明治学院大学教授　山崎美貴子
横浜国立大学水泳部
明治大学教授　横田　澄司
明治大学マーケティング研究会　川原　栄峰
早稲田大学教授　田村　晥司
杉野女子大学教授　小野　哲郎
明治学院大学教授　治男
東京外国語大学教授　田中　丸山　静雄
国際商科大学教授　村越　洋子
大月短期大学助教授　林　俊一
独協大学教授　柳下　勇
横浜市立大学教授　土山　牧民
玉川大学教授
東放学園専門学校
第2回関東信越地区高等専門学校庭球交流会
京浜女子大学生物学セミナー
青山学院高等部宗教修養会
九大学合同セミナー
国際キリスト教青年交換
学生年輪の会夏の集い
第103回大学共同セミナー
日本ワイルド協会
経済地理学研究会
日本ＯＲ学会
大学英語教育学会
上智大学カウンセリング研究所
阿佐ヶ谷教会信友会
松月会
新生活運動協会
日本化学会
日本肢体不自由児協会
日本外語学院
京王プラザホテル
日本化薬
ソフトウェアマネジメント
ベスト
電電公社武蔵野電気通信研究所
中村屋
伊勢丹労働組合
トーエイ工業
日本電気
児童作文を読む会
【個人利用】
立教大学教授＊　中野　光
東京ガス不動産　米山　哲夫
大東文化大学講師　太田　政男
和光大学助教授　梅原　利夫
産業能率大学助教授　山田　善靖
ジャパンタイムス　田中　満
【日帰り利用】
萬緑城東句会

編集後記

本号で第1回大学院共同セミナーを大きく取上げたのは、学部学生を主たる対象として創めた共同セミナーが、大学院生も含めたプログラムに発展した今日的意味を強調したいためである。参加者のレポートからもうかがえるが、大学院共同セミナーを実現したことは、時を得たといってよいであろう。それだけ前田護郎先生をはじめ参加された先生方も意欲的であった。最初の試みを成功させた幸先のよいご報告ができることを喜びとしたい。（能）